UNIVERSITY OF CAMBRIDGE

ORIENTAL STUDIES TRIPOS Part II

Japanese Studies

Monday 31 May 2010 13.30 – 16.30

J.13 JAPANESE TEXTS, 2

Answer BOTH sections.

*Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** Section booklet.*

STATIONERY REQUIREMENTS
20 page Answer Book x 1
A Rough Work Pad

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed that you may do so by the Invigilator

SECTION A

Answer **one** *of the following questions taken from unseen texts*:

1 Translate the following UNSEEN text into English: [40 marks]

この小説が表しているように戦争中の記憶は、日本人にとっては、全部の日本人というわけじゃないですが、いまの四〇歳以上の日本人にとって、いやな記憶です。彼らは、というより私自身も含まれていますから、私たちは、その記憶を心の底の奥深くに埋めてしまいたいという強い潜在的な望みをもっているのです。その時代の記憶とまっすぐにもう一度対面するのはいやだ、ということです。こういうことについては、日本人のあいだで世代間の感じ方のちがいがあります。戦後に育ってきた、より若い日本人の中には、彼らの父親が戦争中何をしてきたかということをはっきり知りたいというふうに問い詰める人もいます。そういうふうに聞かれると、親のほうでは、少なくとも男親のほうでは、答えるのがいやだという感じがする人もずいぶんいます。戦争中に起こった出来事をどのように覚えているか、どのようにそれを心の中ですり替えて別のものにしているか、どのようにそれを解釈しているか、どのようにそれを表現しているか、それ

を調べて見ることは、日本文化を理解するひとつの手がかりを与えます。こういう着眼をもって、十五年戦争のあいだの主な出来事を主として軍事的な展開の成り行きをたどってみましょう。

一九三一年九月一八日、中国北東部の満州に派遣されていた日本軍の数人の参謀将校は、奉天から北に三マイルほど離れていた柳条溝というところで、当時日本の管理下にあった南満州鉄道の線路を爆破する計画を立てました。そのことについて、彼らは、派遣軍の司令官や参謀長には前もって報告しておきませんでした。実際にその線路を爆破した人は、河本末守中尉と彼の指揮下にあった何人かの兵士たちでした。しかしこの事件は、中国人がしたことであるというふうに報道されました。事件の責任は中国人になすりつけられてしまったのです。日本軍は、そのようにこの事件を報道し、日本の内地の新聞もまた、この軍の発表をそのまま繰り返しました。日本軍は、すぐさま、この爆破に対する復讐作戦に移りました。戦闘が始まって、その戦闘状態は宣戦布告がないままに「満州事変」と名付けられました。

この秘密計画の裏には、当時日本の派遣軍、関東軍の参謀将校の一人であった石原莞爾中佐がいました。この人は、日本が満州に軍事上の砦をつくる必要があるという理論をつくっていて、その砦によって、やがておそらくは日本と西欧諸国とのあいだに戦われるであろう世界最終戦に対する準備をするという考え方でした。

潜在的	latent, potential
参謀将校	General Staff and Commissioned Officers
奉天	Mukden (place name)
河本末守	Kōmoto Suemori
石原莞爾	Ishiwara Kanji
砦	fortress

Tsurumi Shunsuke, *Senjiki Nihon no seishinshi*, Iwanami shoten, 1982, p. 146-147.

(TURN OVER

2 Translate into English: [40 marks]

母性と父性

子育てをめぐる親の役割を論ずるにあたって，しばしば話題になるのが，母性・父性の問題である。女性には母性があるのだから子どもを育てるのは女性のほうが適しているという言説が，これまで社会通念のようになっているが，それをめぐってはさまざまな議論がある。もし，母性が「出産・授乳の生理的機能」をさすとすれば，それはたしかに女性にしか備わっていない機能であるし，世代の再生産のためには社会的に尊重され，配慮されるべき機能であることは疑いない。しかし，出産・授乳機能自体は子育て機能とは別物である。子育てとは，かなり長期にわたる包括的な活動であり，しかもそれは100％社会的な機能である。問題

question continues…

は，母性という「一枚看板」のもとで，出産・授乳という生理的機能と子育てという社会的機能を故意に連動させて考えようとする，あるいは考えたがる思考枠組みが，18 世紀以来今日まで，さまざまな論法を駆使して繰り返されてきたという事実である。

母性はしばしば，というよりもほとんどつねに，ある社会の社会的規範や男女の役割をめぐる「望ましさの文化」と結びついて語られる。その典型が「母性愛」の強調である。母性愛は，18 世紀半ばに啓蒙思想家や教会関係者，医師らによって唱えられ，称揚されるようになったとされるが，17 世紀までは，宗教的・道徳的理由により女性（母親）は子どもの教育には適切ではないとされていたことを考えると皮肉な話である。「良き母親とは，性的欲望をはじめ自分自身に対するいかなる欲望も抱かず，家庭と子どものために自己を犠牲にして献身する女性である」とする啓蒙思想家ルソーの説いた「聖なる母親」イメージが，「母性愛の崇高さ」とともに，その後 20 世紀に至るまでながく信奉され，母親になることが女性にとって唯一の自己実現であるかのように思い込まされてきた。

包括的	inclusive, comprehensive
一枚看板	Top billing, headline
故意	intention, purpose
連動	be linked together, working together
論法	line of argument, logic, reasoning
駆使する	order around, use freely
啓蒙	Enlightenment
称揚	praise, admiration
皮肉	sarcasm, nastiness
献身	devotion, dedication, self-sacrifice
信奉	belief, faith

Iwakami Mami, ‘Bosei to fusei’ *Raifukōsu to jendā de yomu kazoku* (2007), pp. 143-144.

(TURN OVER

SECTION B
Answer BOTH questions

3 Translate the following SEEN text into English: [30 marks]

序論　身体教育という主題

「江戸時代の人々は走ることができなかった」と、私の周辺の学生たちに話すと、彼ら彼女らは、怪訝な顔をする。いくら時代が違ったとしても、同じ人間である以上、「走る」などという基本的な運動ができないわけがないだろう、というのである。江戸の庶民は、日常生活の中で走る必要などなかったのであり、現代人のようには走れなかった。また、確かに、武士や飛脚といった人たちは走らなければならなかったが、その走り方は現代人のそれとは随分違ったものであったことが指摘されている。(1) さらに、「明治以前の人々は、基本的に、手と足をいっしょにして、すなわち、右足を出すとき右手を出し、左足を出すとき左手を出す、といったふうにして歩いていた」などと述べて、実際にその身振りをやってみせると、笑いが起こる。

ここに挙げた、走ることや歩くことの身体技法の問題は、いわゆる「ナンバ」の技法の問題であり、武智鉄二の日本文化論を受けて、すでに三浦雅士が『身体の零度』において指摘していることである。(2) それによれば、「右足が前に出るとき右手も前へ出す」というのは、ナンバの説明として正確ではなく、むしろ、右足が前へ出るとき、右肩あるいは右半身が前に出る動きだという。この

question continues…

ような動きの姿勢は、例えば、剣道や柔道での「構え」や、綱引きで力を込めて綱を引こうとするときの手と足の関係を思い出してみたとき、なるほどと思うことができるだろう。また、鍬で畑を耕す動作においても同じ様な姿勢を見出すことができる。右利きの人であれば、柄の先を左手で持ち、右手でさきという金具が付いている方を握って、右足を前に左足を後ろに構えて、鍬を振り下ろす。いずれも、足が出ている側の上半身が前方に出てくるのであり、右足が前、右手が前という恰好がそこに見出せる。

歩くという動作を考えたとき、イメージしやすいのは、和服を着た女性が歩く動きであろう。両手を前方の大腿部に軽く添え、小またで静々と歩く。右足が前に出るとき、同じ様に右腰、右肩が前方に出る。この歩き方のイメージから理解できるように、ナンバの歩き方は、右足が前に出るとき右手が、左足が前に出るとき左手が前方に来るように手を振って歩くことなのではなく、要するに、手を振らないで歩く歩き方と考えるべきなのである。手を振らないことについての武智の説明は、「農民は本来手を振らない。手を振ること自体無駄なエネルギーのロスであるし、また手を振って反動を利用する必要が、農耕生産にはない」[3]ということだ。

Higuchi Satoshi (2005) *Shintai kyōiku no shisō*. Tōkyō: Keisō shobō, pp. 1-2

(TURN OVER

4 Translate the following SEEN text into English: [30 marks]

2 孫文の日本観

前節では李大釗の日本観とくに「大アジア主義」批判を検討したが、次に、本節では、当時国民党の指導者であった孫文の日本観の到達点として、一九二四年の三民主義講演およびいわゆる「大アジア主義」講演の中で、孫文が日本をどのように見ていたかを取り上げてみよう。

孫文は、一九二四年一月から八月まで、広州で行なった一連の「三民主義」講演において、日本についてしばしば言及している。孫文は、一方では日本をある程度高く評価しながらも、他方では日本を厳しく批判している。前者の例として、孫文は、日本は民族主義を高揚したことによって強国になりえたのであるとしている。「かれらには民族主義の精神があったために、奮起して強大となることができた。五〇年もたたないうちに、衰微した国家から強盛な国家に変わったのである。われわれが中国を強盛にするには、日本がよい模範の一つである。」「近年、急に日本という国が勃興し、世界における第一級の富強な国家になったのである。日本が富強になりえたということは、アジアの各国に限りない希望を生み出した。(8)」孫文は、同時に、日本が強国になりえたもう一つの理由として、明治維新後の日本が、欧米の文化あるいは科学から多くを学んだことを挙げて、次のように述べている。

「日本人はヨーロッパに学ぶことができたからこそ、維新後ヨーロッパに追いついたのである。ヨーロッパ大戦が停戦となったのち、列強がベルサイユで世界平和を論じたとき、日本の国際的地位は五大強国の一つになった。アジアに関する問題が提起されると、列強はいずれも日本の指図に従い、ひたすら日本の鼻息をうかがっている。このことから見ても、白人にできる事は、日本人にもできるということがわかる。世界の人種は、顔の色は違っていても、聡明さや才智という点では、何らの区別もないといえる。今日、アジアには強盛な日本があるために、世界の白色人種は、敢て日本人を軽視しないのみでなく、敢てアジア人を軽視しなくなったのである。それ故、日本

question continues…

が強盛になったのちは、大和民族が第一級の民族としての尊敬と光栄を享受できるだけでなく、その他のアジア人も国際的地位を高めることが出来たのである。以前には、ヨーロッパ人に出来ることでも、われわれには出来ないと考えられていた。今では日本人がヨーロッパに学ぶことができたことから、われわれが日本に学ぶことができるということがわかった。われわれは、学んで日本のようになれるのであり、将来は、学んでヨーロッパのようにもなれることが知られるのである。(9)」

「日本のこれまでの文化は、中国から学んだものであって、中国よりもずっと低かった。ところが、日本は近年、もっぱら欧米の文化に学び、わずか数十年で世界の列強の一つとなった。私は、中国人の聡明さと才能智力は、日本に劣らないと思う。われわれが今後欧米に学ぶのは、日本よりも容易なはずである。従って、これからの一〇年間が、われわれの生死の分かれ目である。もしもわれわれが目覚めて、日本人のように、皆が一生懸命気をつけて、民族の地位を回復するならば、一〇年の間に、外国からの政治・経済・人口増加という様々な圧迫、様々な禍害を、すべて一挙に消滅することができる。日本は欧米にわずか数十年学んだだけで、世界の列強の一つになった。だが、中国の人口は日本の一〇倍あり、領土は日本の三〇倍ある。資源も日本より多い。

Fujii Shōzō, 'Chūgokujin no Nihonkan,' *Shakaikagaku tōkyū*, March 1950, p. 213-214.

END OF PAPER